「ソドムの滅亡」（創世記一九章一～二九節）

1　主なる神のご支配

先週は、ソドムのためのアブラハムの執り成し、そのための主なる神との対話を聖書から聞いたところです。少し振り返ってから、今日の箇所第一九章に入りたいと思います。

問題になっている町は、ソドムとゴモラです。主にソドムに起きたことがこの章の中心になります。ソドムという町は、当時カナンと呼ばれたこの地域の低地地帯、死海という湖がありますが、その南にあった町です。ソドムは、ゴモラも同じく、アブラハムがこのカナンの高地に住み始めたときには（といっても半遊牧の天幕生活ですけれども）すでにあった町です。「ソドムの門」（一節）という言葉が今日の最初のところにありました。城壁に囲まれた、むしろ都市と言うべきところです。

この町を神がいま滅ぼそうとしているのです。そしてその思いを神はアブラハムに打ち明け、その上で、ソドムの罪を告発する声が自分のところに多く届いているけれど、それが本当かどうか確かめようと、二人の御使いを、ソドムに遣わしたところです（一八・二二）。

ソドムを滅ぼすという神の意志をアブラハムは知り、神の前に立ち、進み出て（一八・二三）、もちろん謙遜のかぎりを尽くし、対話を試みています。主なる神よ、あなたが「全世界を裁くお方」であるなら、その裁きは公正になされるべきだ、正義が行われなければならない、と。

とても印象深い対話でした。その対話によって、アブラハムは、最終的に、ソドムにもし正しい人が一〇人いれば、その人たちのため町全部を滅ぼすことはしないという、神の言明を引き出します。

神とアブラハムの対話は、正しい人が一〇人いれば、までで、それ以下にはなりませんでした。五〇人から一〇人ずつ下がってきたので、そのペースでいくと、一〇人が議論としては終わりになります。

いずれにせよ一〇人いたら滅ぼさない（一八・三二）というのです。しかし今日の聖書箇所は、ソドム全部が滅ぼされたことを伝えています。

> 主はソドムとゴモラの上に天から、主のもとから硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を、町の全住民、地の草もろとも滅ぼした（二四～二五節）。

神の根本の思いは、救いです。憐れみです。それはアブラハムとの対話の中でも明らかになったことです。それが変わることはありません。しかしそれが、ここソドムで実際に示されることはありませんでした。つまり正しい人は一〇人いなかった。もちろん一〇人という数字にこだわる必要はないかも知れません。一一人いる、九人しかいない、ということではない。しかしそれほどにソドムの罪は深かった、重かったということです。

このソドムの滅亡をもって、私どもが何か、暴君のようなイメージを、神に対してもつとすれば、それは正しいことではありません。正義をもって神は世界を治めてお

られる。正義をもってとは、主なる神にあっては、憐れみをもってということと同じです。ソドムは神の正義のゆえに滅ぼされます。そこに住んでいたアブラハムの甥ロトは憐れみによって救い出されます。

2　ソドムの罪と罰

ソドムが滅ぼされるに至るまで、少し今日の聖書を辿ってみましょう。今日の箇所は二人の御使いが「夕方」（一節）ソドムに到着し、その「夜」（二節）起こったことを伝えています。翌日、「太陽が地上に上ったとき」（二三節）には、もう決着がついていました。

アブラハムが神と対面したヘブロンのマムレの樫の木の所から低地の町ソドムまでおよそ六〇キロです。二人の御使いは夕方ソドムに到着します。ロトがソドムの門のところに座っていたとあります（一節）。二人の来訪は事前には知られていない。迎えに出ていたわけではありません。

しかし彼らを見るとロトは、アブラハムがそうであったように、彼ら客人を急いで迎え入れようとします。

御使いは、はじめこれを断ります。「いや、結構です。わたしたちはこの広場で夜を過ごします」（二節）。御使いの務めは、ソドムとゴモラの罪が、どのくらいのものか、神の耳に届いた訴えは果たして本当なのか、それをじっさいに確かめることにありました。そのためには、むしろ「広場で夜を過ごす」ほうが好都合だったのだと思われます。

しかしロトは、その町の危険なことはよく分かっていました。何とか家に引き入れて、その上でもてなしたかったのです。

果たして、ロトのところに来客があったことを聞きつけ、ソドムの男たちが、やってきます。若者も年寄りもこぞって押しかけ、家を取り囲んで、わめきたてた、とあります（四節）。彼らはこう要求します。

> 今夜、お前のところへ来た連中はどこにいる。ここへ連れて来い。なぶりものにしてやるから（五節）。

これに対してロトは、戸口の前にたむろしていた男たちのところに出て行き、こう言うのです。

> どうか、皆さん、乱暴なことはしないでください。実は、わたしにはまだ嫁がせていない娘が二人おります。皆さんにその娘を差し出しますから、好きなようにしてください。ただ、あの方々には何もしないでください。この家の屋根の下に身を寄せていただいたのですから。男たちは口々に言った。「そこをどけ」。「こいつは、よそ者のくせに、指図などして」。「さあ、彼らより先に、お前を痛い目に遭わせてやる」。そして、ロトに詰め寄って体を押しつけ、戸をやぶろうとした（七～九節）。

最初の呼びかけ、「皆さん」は、もともと兄弟たちよ（口語訳、協会共同訳）、という言い方です。同じ兄弟ではないかという言い方で、ロトは彼らに感情的な同情や譲歩を求めたのでしょうか。しかしそんなことなど通用しない。彼らはロトを「よそ者」と見ていたからです。それなのに「指図」しようとする。「いつも、さばきびとになろうとする」（口語訳）。ロトはこの町に溶けこもうとしてきたのでしょうけれど、浮き上がった存在だったことが明らかになっています。

それにしても、娘を差し出すという行為は、客人を守るためという理由であれ、旧約聖書の信仰からしても、許されることではない。客人が神の使いと分かっていたとしても、憐れみの神とは反します。もし神の使いなら、むしろ彼らに助けを求めるべきですし、何より、少し厳しく言えば、自らを犠牲とすることは全く視野に入らなかったのでしょうか。

それにしても、ソドムの男たちは、二人のロトの娘も取引材料とならないほど悪徳に染まっていたようです。彼らの罪は実証されたといってよいのです。

ところでソドムの男たちの「なぶりものにしてやる」と訳されている五節の言葉はもともと「知る」という言葉（口語訳、協会共同訳、岩波、他）で、聖書では性的な意味をときに含む言葉です。そこからソドムの罪は男性の同性愛であったという説がなされます。

それもあったかも知れません。しかしそれだけではない。聖書はいつも、ソドムあるいはソドムとゴモラを、最悪の堕落の象徴として言及しています。ソドムの出来事から千年以上もあとの預言者たち、イザヤも、エレミヤも、そしてエゼキエルもそうです。預言者たちは、彼らの時代のイスラエルの罪を、ソドムと重ねて、その延長線上に見ているのです。

> お前の妹、ソドムの罪はこれである。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き安閑と暮らしていながら、貧しい者、乏しい者を助けようともしなかった。彼女たちは傲慢にも、わたしの目の前で忌まわしいことを行った。そのために、わたしが彼女たちを滅ぼしたのは、お前の見た通りである（エゼキエル一六・四九～五〇）。

ソドムとゴモラの罪を主なる神は放置なさいません。正義が行われるとは、それが裁かれることです。ソドムは滅ぼされます。遠い遠い時代のソドムの滅亡は、正義と憐れみの神の物語として、預言者たちに、新約聖書のイエスに、さらに使徒たちにも受け継がれてきたのです。

3　ロトの救い

ソドムとゴモラは滅ぼされます。しかし同時に伝えられているのは、ロトが救われたことでした。今日の箇所は、後半全部を使って、二人の御使いによる神の救いを私どもに伝えています。

御使いによって、目つぶしをくらったソドムの男たちが、右往左往しているあいだに、ロトは、身内を皆引き連れて逃げるように促されます。ロトは真っ先に「嫁いだ

娘たちの婿」のところに行きます。しかし彼らは「冗談」（一四節）だと思って信用しない、相手にしない。ソドム人の彼らも、結局、一緒に滅びたようです。

いまや夜が明けようとしています。御使いは、ロトに妻と二人の娘を連れて行くよう命じます。しかしロトは「ためらっていた」（一六節）とあります。ソドムにまだ未練があるのでしょうか。御使いは、ロトに「妻、二人の娘の手をとらせて」町外れに連れ出します。それは主が「憐れんで」くれたからだと聖書は語っています。御使いは「うしろを振り返ってはならない」（一七節）と命じつつ、山に逃げるように指示します。

ところが、また（信仰の）ぐずぐずが始まるのです。

> 主よ、できません。あなたは僕に目を留め、慈しみを豊かに示し、命を救おうとしてくださいます。しかし、わたしは山まで逃げ延びることはできません。おそらく、災害に巻き込まれて、死んでしまうでしょう。・・・（一八～一九節）。

神が御使いによって救いを与えようとしたとき、ロトは、自分の前に横たわる困難が、大きな乗り越えられないものに見えたのです。彼は、主なる神がくだした決断を括弧に入れて、信仰を一時棚上げして（バルト）、またもやもとの人間的なところへ戻ろうとします。ここでもしかし、主なる神はそれを許しています（二一節）。こうしてロトは、ツォアルに身を寄せたのです。その直後、彼らの後ろで、ソドムもゴモラも滅ぼされます。

ロトの妻は振り返るなという命令を破って振り返って見たため、「塩の柱」となって、助かりませんでした。ロトは二人の娘と共に救い出されます。しかしそれはロト自身の信仰のお陰だったというわけではありません。主の「憐れみ」（一六節）、「慈しみ」（一八節）以外のなにものでもなかったのです。むしろロトが救われたことを今日の箇所はこう言っています。

> こうして、ロトの住んでいた低地の町々は滅ぼされたが、神はアブラハムを御心に留め、ロトを破滅のただ中から救い出された（二九節）。

アブラハムのゆえに、神はロトは救い出された。アブラハムのソドムのための執り成しはロトを救うことになります。なるほどロトの信仰はアブラハムに比べれは、そう賞賛されるものではないかも知れません。しかしその彼もアブラハムのゆえに救われるのです。

そうすると、神の前に立つアブラハムの姿に、私どもはイエス・キリストを重ねて思い起こしていいのだと思います。「彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」（ヘブル七・二五、口語訳）。いまはこのイエス・キリストのゆえに、私どもだれもが救いにあずかることができる。そのことを今日も感謝したいと思います。

（二〇二〇・九・二〇）